

## 2017 ICG Annual Meeting 参加報告

弘前大学 大学院理工学研究科

増野 敦信

### Report on 2017 ICG Annual Meeting

Atsunobu Masuno

Graduate School of Science and Technology, Hirosaki University

2017年のICG Annual Meetingはトルコのイスタンブールで開催された。会期は2017年10月22日から25日までの4日間、会場はイスタンブール中心街からバスで30分ほどのHALIÇ CONGRESS CENTERであった。やや中心街から離れており、まわりに何もないところであったため、日中はずっと会場に缶詰状態であった。とはいえコーヒープレイクやランチタイムでは十分な料理が提供されたので、特に外に出る必要性は感じなかった。

ICGとはInternational Commission on Glassの略称であり、世界中のガラスに関係する産官学の人々を結ぶ国際的な非営利団体である。本誌の読者であれば多くの方がその活動に多少なりとも関わったことはあるだろう。ICGの活動は多岐にわたるが、重要なものの一つにガラスのScienceとTechnologyに関する学会の開催



コーヒープレイクの様子。奥に見える建物が学会会場。

がある。参加者1000人規模のCongressは3年に1度、300～500人程度のAnnual MeetingはCongressがない年に開かれる。前回のCongressは2016年に上海で行われ、次の2019年はボストンとなることが決まっている。Annual Meetingは2017年がイスタンブールで、そして2018年の今年は横浜で開催される。

多くの場合、主催国の産官学が協力して学会を運営することになるのだが、今回のAnnual Meetingではその様子がいつもと異なってい

〒036-8152

弘前市文京町3番地

TEL 0172-39-3563

E-mail: masuno@hirosaki-u.ac.jp

た。学会を取り仕切っていたのはほぼ完全にトルコのガラス会社である Şişecam であり、そのことをかなり積極的にアピールしていた。やや違和感をおぼえつつも、学会ホームページや配布されたプログラムなどを改めて確認してみると、正式な学会名は、2017 ICG Annual Meeting & 32<sup>nd</sup> Şişecam Glass Symposium となっていたので納得した。今回の Annual Meeting は Şişecam の学会だったのである。そのことを反映してか、参加者の所属や発表内容にも大きな偏りがあった。421 名の参加者のうち、380 名がヨーロッパから、29 名がアジアから、そして 8 名がアメリカからであり、あわせて 26 カ国からと報告された。アメリカからの参加者が異常に少ないのは、会期の少し前にアメリカとトルコの間でビザの発給が停止されてしまったからである。このことが原因で入国できなかったため受賞講演の一つがキャンセルとなってしまった。日本からは 10 名程度の参加であったが、これはいつもの Annual Meeting よりも大幅に少ない。同時期に他にも学会が開かれていたことや、テロへの不安などがあったためだと思われる。ヨーロッパから多くの人々が参加したように見えるが、じつはそのほとんどはトルコから、つまり Şişecam 関連の参加者である。そのためかどうかはわからないが、ガラスに関するベーシックなサイエンスに関する発表は少なく、そうしたセッションにはほとんど人が集まっていなかった（数人しかいない聴衆の前で話すのはなかなかつらい状況である）。一方で、製造技術

関連のセッションをのぞいてみると、満員となるほど盛況な発表も多かった。

全体で 29 のセッションが 5 会場で並行して進められた。内訳は 6 件の Plenary talk, 24 件の招待講演、そして 94 件の口頭発表と 18 件のポスターであった。学会初日、Opening Ceremony の後に 3 件の Plenary talk があったが、そのうち Lothar Wondraczek 氏による “Smart Glasses in Large-Area Fluidic Windows and Suspended Particle Devices for Facade Integration” というタイトルの講演は、窓ガラス中に機能流体を流し込み、それを制御するシステムを構築することで、熱や色調をコントロールできるスマートガラスを創り出す話であり、個々の技術を組み合わせることで、新しい素材ができあがることを見せつけた刺激的な発表であった。

会期中のコーヒープレイクでは、トルコ名物のトルココーヒーとチャイが振る舞われた。初めてのトルココーヒーは最初は飲み方が下手で粉っぽく感じていたが、それでもクッキーやケーキととてもよくあっておいしかった。チャイといえばインドの甘いミルクティーを思い浮かべていたのだが、トルコのチャイは普通の紅茶で、小さなひょうたん型のカップに入れて出される。この形が妙に気に入ってしまい、町中のバザーで全く同じものを見つけたので結局購入してしまった。コーヒープレイクで一緒になった Şişecam の人から、このカップはトルコで最初のガラス製造会社である Paşabahçe（今では



トルココーヒー、チャイ専用カップ、Paşabahçe のロゴマーク

Şişecam ホールディングの中に組み込まれている)が製造していると教えてもらった。カップの底に特徴的なマークが記されており、記憶に残っている参加者もいると思う。

学会参加前は、テロなどの不安もあったが、実際に過ごしてみるとそうした雰囲気はほとんど感じなかった。ガラタ橋の上では毎日大勢の人が釣りを楽しんでおり、その橋のもとでは名物サバサンドが売られていた。おござっぱな料理なのに非常においしかった。総じて食事は

日本人の口に合うものばかりで、また訪れたいと思わせてくれる街であった。

先にも述べましたが、今年は横浜で ICG Annual Meeting が開催されます。参加して良かったと思ってもらえるよう、実行委員の一人として準備を進めています。本号が出版される頃はまだ参加登録ができるはずですが、詳しくはホームページ (<http://www.icg2018.yokohama.com/>) をご確認ください。



船から見えるモスク